様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６６８
研究種目：基盤研究(B)（特設分野研究）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８ＫＴ００３４

研究課題名（和文）手話のオラリティとアジアろうコミュニティでの社会貢献への応用

研究課題名（英文）Orality of sign languages and its applicability to contribution to Asian Deaf communities

研究代表者
斉藤　くるみ（Saito, Kurumi）

日本社会事業大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：３０２２５７００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　10,800,000円

研究成果の概要（和文）：オラリティとは声であり、リタラシーは視覚的記号、文字であると考えられている。しかし言語学や脳科学で手話は言語であることは十分証明されており、手話においてオラリティとリタラシーの差にあたるものを探せば、モダリティに惑わされず、真の意味のオラリティとリタラシーの本質がわかるはずである。本研究ではこのような発想で手話を分析し、観察し、オラリティとリタラシーの差が見いだされた。
　またアジアの手話を比較することで、相互の理解度の高いものとオラリティが関係があることがわかった。咄嗟に通じようとする自然な手話（オラリティ）はビデオ教材などに収録される手話単語や手話表現（リテラシー）よりも相互理解度が高い。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　音声言語と書記言語が視覚・聴覚等のモダリティと切り離すことが難しいため、言語研究はモダリティに惑わされてきた。本研究における手話のオラリティとリタラシーの存在の証明は、言語をモダリティと切り離して分析することの意義を証明した。
　研究の手段としてアジアの国々の手話の相互理解度を調べた。咄嗟に通じようとする手話表現（オラリティと考えてよい）はCLや形態論のレベルでのiconicityが豊富で相互理解度も高い。一方、ビデオ教材のための手話（リタラシーと考えてよい）は必ずしも相互理解度は高くない。本研究がアジアの国々で相互に通じる災害手話作成等、リスクマネジメントにつながれば、国際社会にも貢献する。

研究成果の概要（英文）：　Researchers have considered orality as voice, and literacy as visual letters for many years, which is not correct. Linguists and neuro scientists already proved that sign language is a language. The true nature of language has nothing to do with voice. The purpose of this research is to redefine orality and literacy without being misled by modality. Although sign language does not have voice nor letters, sign language has its "orality and literacy".
　We examined mutual intelligibility of Asian sign languages. The relationship between what the sign means and who signs is reflected on morphological structure. When morphemes suffer conflict, the structure depends on individual signers, which is sign of orality, full of CL and highly intelligible. Sign words, phrases and sentences which are included in video materials for sign learners are regarded as sign language of literacy. Such kind of sign language does not have Necessarily high intelligibility.

研究分野：言語学

キーワード：手話　オラリティ　リテラシー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究者たちは、「オラリティ」とは読んで字のごとく音声と切り離せないものと考えてきた。しかし研究者たちは、単純にオラリティとは音声のことで、リタラシーとは文字のことだと考えてきたわけではない。そうであれば「音声」と「文字」という用語があれば十分である。オング以来、オラリティとリテラシーという言葉は「音声」か「文字」かという以上の抽象的な概念として論じられてきた(Ong 1982)。一方、音声も文字もない手話は、言語学的にも脳科学的にも言語であると認められた。今やこれは誰も疑わない。オラリティからリテラシーへ移っていく変化が言語というものに、普遍的に存在するならば、オラリティとリテラシーという概念を聴覚記号（「音声」）か視覚記号（「文字」）かということと切り離して考えなければならない。

２．研究の目的

オラリティとリテラシーという概念は、手話の言語性がなかなか認められなかったことと大きく関係がある。オラリティからリテラシーへという転換は、聴覚から視覚へのモーダリティの転換がなければ存在し得ないのかを検証する。

第一にオラリティとリテラシーという概念が手話にあてはまることを明らかにすること、第二にオラリティをモーダリティと混同せず、見直すこと、第三に手話のオラリティ研究の成果を研究者に提供すると同時に、ろうコミュニティ及びろう国際社会に貢献するために提供することを目的とする。

３．研究の方法

オラリティとその概念の根拠となるリテラシーについて言語学、脳科学の視点から検証した。さらに手話という言語について、また手話者の認知構造について、オラリティの視点で考察した。聴覚障害者・視覚障害者の言語行動に照らして、モーダリティに惑わされず、オラリティの概念の見直しが必要であることを示していった。

次に、手話のオラリティを見つけて行った。過去集めたアジア諸国の災害手話から、自然な手話にはアジア各国で intelligibility（別の国の手話でも何を意味するか当てられる）が高いものが多いことに注目した。手話の intelligibility の理由としてしばしば iconicity（図像性＝見たままにそのものの形をあらわすもの）が指摘されてきた。Iconicity の一部で手話に独特な規則的な表出の仕方を CL（classifier）という。これはものの形状・動きに基づくもので、その手話の中で限られた表現方法があり、その場限りのジェスチャーとは違う。

一方、外来語とも言える指文字が手話には含まれている。これはその手話の使われている国（またはコミュニティー）で使われる音声言語の書記言語（リタラシー）に基づくものであり、その手話の音素ではないが、頻繁に使われるものや、手話と合成されて使われる場合には assimilate すなわち手話の音韻論にとりこまれ、手話らしい形や動きに変わることがある。これは音声言語のリテラシーによるものであるが、これが手話のリテラシーということはできない。これは手話にとってあくまで外来語であり、手話者が生み出したリテラシーとは無縁のものである。

手話は音声言語との接触にさらされる宿命をもつが、学校教育を十分うけられなかった恒例のろう者の手話は純粋な日本手話の特徴をもつと考えられている。これには CL が豊富に含まれている。彼らが仲間の中で自然にしゃべる手話はオラリティと考えてよい。これに対してリテラシーへの転換があり得るかを検証した。

CL、iconicity、intelligibility に注目して手話を収集・観察し、「oral でない」手話というものに「オラリティ」（およびそれに対比するリテラシー）が存在し得ることを証明することで、オラリティからリテラシーが生まれることは音声言語でも手話でも同様に見られる言語の性質であることを示していった。

４．研究成果

（１）オラリティーとリテラシーという概念の研究

オラリティとは、リタラシーというものあっての概念である。そしてその語源は「音声」を意味する。人類はどんな民族でも言語を持つ、と言うとき、それはオラリティであり、リテラシーはどんな人類でも持っているわけではない。過去人類が言語を持つようになってから 7 万年とも 10 万年とも言われるが、文字を持ったのは最近わずか 5000 年程度のことであるし、現代の世界でも文字を持たない言語は多数ある。またその言語に文字があっても、読み書きできない人（illiterate）もいる。つまり、リテラシーは、現代社会では必要なものであるが、言語の言語たること（言語性）と文字の有無は直接の関係はない。

それぞれの言語で、その言語特有の音素の体系を意識して初めて書記システムは生まれる。文字は借り物でも、書記システムができてくる過程は、その言語特有の音声の体系（音韻論）を文字で表そうという意識を話者が持つことで進んでいく。

道具がなければできない書くという行為は何を意味するのか。また書記システムは視覚記号

であることが必須であろうか。テクノロジーの発達で、音も録音できるようになったり、手話もビデオで録画できるようになったことはことは極めて重要な変化である。録音もビデオも、書記資料と同様に、繰り返し聞くこと、繰り返し見ることができる。そして記録しておくとなると、話者が自然な発話とは違う、固定化を意識した言語行動をするようになると考えられる。

文字のない文化、あるいは文字のなかった時代には伝承などで文化を継承したのであり、そのころの人間の記憶力は現代の文字を持つ人間とは違っていたであろう。そして今も無文字文化に生きる人の記憶力は私たちの記憶力とは違うであろう。これは文字のない手話（現存する世界の手話には文字を持つ手話はない）の話者がそれを詩にするなどの形で伝承するのに似ている。

記憶、記録ということ以外に、自らの発話をメタ認知し、さらなる思考のツールとすることもリテラシー発現の理由であると思われる。自然に発せられた言語をオラリティ、それを記憶・記録するための行為、あるいは自らが生産した言語をメタ認知（さらに再考）するための行為、およびそのアウトカムをリテラシーと考えてよいと思われる。

無文字文化において伝承してきた言語は、自然に発せられた言語とは違う。この両者を同じオラリティに含めるのは無理がある。チョムスキー言語学で言えば前者はコンピテンス、後者はパフォーマンスに近いし、ソシュール言語学のラングとパロールの対比にも似ている。オラリティとリタラシーの古典を書いたオングは言語をオラリティとリタラシーに分けながら、オラリティの中に二つあることを認めている(Ong 1982)。この二つの違いが手話を検証することにより、明確になったと言える。

メディアやモーダリティに関わらず、言語にはオラリティとリタラシーが存在し得ると考えられ、従来よりもより論理的で一貫した定義でオラリティとリタラシーを捉え直すべきであるという結論に達した。さらにもしもモーダリティにまどわされないならば二つに分けるのではなく三段階・四段階で考える方が適当であると言う可能性もある。

（2）オラリティ・リテラシーと脳科学

20 世紀の終わりに、PET や fMRI で、目覚めた状態の脳の状態が直接見られるようになり、言語と脳の関係がより詳細にわかるようになった。そして、今では脳のどのあたりに言語に関するどのような機能が担われているのか、どのような言語行動をすると脳のどの部分が活性化するのか、というようなことまでかなり分かるようになった。手話話者が手話で話しているときの脳は音声言語話者が音声を発しているときの脳と同じ状態、つまりブローカ領域が活性化していること、そして手話話者が手話を見て理解しているときには音声言語話者が音声を聞いて理解しているのと同じ状態、つまりウェルニッケ領域が活性化していることが分かった。

1998 年に A. Castro-Caldas (1998)は子どものときに特別な技術を学ぶことが、脳の機能を変えるのではないかと考え、文字を持たない人と持つ人の脳について調べた。PET を使って、既存のことばと、でたらめなことば（ことばらしい音であるが、存在しないことば）を繰り返し聞かせた。本当に存在することばを聞いているときには、文字を持つ人も持たない人も、脳の活動にあまり違いがないが、でたらめなことばを聞かせると、文字を持つ人と、持たない人の脳の活動は違っていた。文字をもつ人は文字を手掛かりに既存のことばのように認知しているのである。文字を持たない人は、文字を持つ人ほど、知らない単語をよく記憶することができないこともわかった。このことは文字を持つ人の脳の中では、文字言語と音声言語が関連しているということを示している（Castro-Caldas 1998)。

オラリティとリテラシーは言語といえば音声言語しかないと思われている頃に定着した、二つの相対立する概念であって、音声を使わない自然言語を人間が生み出すということが分かった今、もはやオラリティとは「音声」、リテラシーは「文字」という定義では言語の本質を説明できる概念とは言えないという結論に達した。

（3）手話のオラリティの研究

手話は音声言語とまったく違う文法をもつ視覚言語であるにも関わらず音声言語と同じように脳の言語野で生成されていることが 1990 年代に明らかになったことで、手話の理論研究に「音素」「形態素」というような用語が使われるようになった。音声言語の分析方法と同様の理論を使って、手話を分析することは既に常識であり、手話の「音素」や「音韻論」の存在は音声言語と手話が本質的には同じ「言語」であることの証明でもあるのだが、「音」という文字が含まれていることに違和感を唱える研究者は今もいる。それと同様に「オラリティ」と「リテラシー」いう用語、概念、そしてオラリティからリテラシーへという理論は、手話を知ると、違和感を持たざるを得ない。手話は元来 oral なものではない。リテラシーは音声言語を「可視化」するという飛躍を意味するのであるが、その点では手話は最初から可視記号である。リテラシーが道具や技術で言語を記録したり、発話者のメタ認知を促すものとするならば、録画のための手話はリテラシーと呼べないか。研究代表者の大学ではろう者に手話動画で修士論文を提出することを認めた。この論文発表として認められた手話はリテラシーではないのだろうか。記録するためと意識して（何度も録画しなおして）表出する手話は話者が言語として正しいと意識（音素の意識等）して表出しており、自然な会話を隠し撮りされた録画とは異質なものである。むしろ音声言語話者が伝承するために固定化したり、文字に記したものと同質のものと考えられる。

手話はオラリティもリテラシーも持たない言語と言ってよいのかと考えると、むしろこれまでの理論研究がモーダリティに惑わされて言語の本質を見ていなかったことがわかる。

手話は発せられてはすぐ消える線状（linear）の音声とは全く違う構造を持ち、手の形、動き、位置と眉上げや視線や頷きなどの記号で総合的に構成されるものであるし、静止した状態を作ることもできる。これほど異質な特徴を持つ手話であるが、それでも既存の音韻論は今のところ手話を分析することに成功しており、大幅な見直しを必要とされてはいない。つまり音声言語と手話は表面的なモーダリティとは関係ない抽象的なレベルで言語の本質を同じくするのである。

オラリティの研究は、オングの Orality & Literacy （1982）に端を発するが、そこで彼は言語の原点がオラリティ、つまり音声による発話であるとしており、そもそも音声のない手話は想定していない。彼のこの著作は知識と教養にあふれ、言語の重要な性質を解き明かしているが、全編にわたって言語を音声による記号と信じて疑っていない。手話にも言及しているが、言語に入らないと述べている。彼が手話を覚え、手話を使う機会があったならば、そのように断言はしなかったであろうし、この珠玉のクラシックはあちこちで別の論述になっていたであろう。

リテラシーの出現は自己の意識の進化である（from “self consciousness” to “reflectiveness and articulateness about the self” and “highly personal interiority”）とオングが言うときに、「見える」ことをその根拠のひとつとしているのであるが、手話は最初から「見える」ものである。続く研究者たちも、言語の実態は音声であるとして議論を進めて来たのであるが、L.Polic (2001)はニカラグアで新たにできたろうコミュニティーとニカラグア手話の形成について研究する中でオラリティという概念がろう者を完全な人間ではないという印象を持たせる(“Orality is an ideology with ominous implications”)と指摘している。

言語学は音のない言語をもつ民族というものを想定してこなかった。研究者の理論からしても、一般の人々の直感からしても、「オラリティ」という概念がゆえに手話の言語性が認められにくかったのは間違いない。そのことが言語の本質を見失わせてきたことを言語学の中で今後周知させることは、言語学の新たな発展につながると思われる。

（4）手話の記述

先進国も含め、世界のろう者はこれまで手話を文字であらわす方法を開発することはなかった。その理由は音声言語話者に取り囲まれているために、聞いたことはなくとも、マジョリティの音声言語を文字にしたものを習得すべきとされているからである。社会の中でマジョリティが書記システムを持つとき、少数言語話者が自然に書記システムを生み出したならば、それを尊重すべきということになるが、生み出さなければ、わざわざ人工的に書記システムを作るよりも、マジョリティの文字システムを借りてくるのが常である。ろう者は音声を聞けなくても、音声で話せなくても、書記音声言語（日本ならば書記日本語）を覚えて、使うほうが有利である。どのみちその社会でのマジョリティの言語の読み書きだけはできないと、社会参加や高等教育を受けることが難しいからである。これは少数言語話者の宿命である。

もうひとつの理由は、手話は音声言語のように線状（linier）の構造ではなく、右手・左手・視線・眉上げ・頷き・姿勢などがすべて音素であり、それらの複数の音素が同時に発せられるため、文字という二次元の紙の上に書く記号を開発することは困難であるということである。現在手話の記号（文字）化を試みている研究者もいるが、それは手話者のリテラシーを念頭に置いているわけではなく、むしろ手話の国際比較や手話の分析のためである。一方、リテラシーは母語とする人の音素の認識を基に開発されるものである。

手話の記述法、たとえば Ham-NoSys は、記号が多く、複雑で、一秒ほどの手話表現に１０個もの記号を並べなければならないこともある。このような記号はその手話固有の音韻体系に則したものではなく、想定されるあらゆる手型・動き・位置、それにともなう視線・眉上げ・頷きなどの言語記号を表現できるものとして開発されているからである。

手話に音素があるということは証明されているが、長い間、音素や音韻論という「音」ありきの名称を、手話にあてはめることに意義を唱えてきた人もいる。オラリティのない言語に「音素」もあるはずがないというのが聞こえる人の直感でもあるが、言語学的に「音素」の存在は証明されているし、異音（allophone）の存在も多く確認されている。

手話は「文字のない言語である」と蔑まれ、ろう者は聞いたことのない音声を文字にしたものを厳しい訓練で覚えない限り、”illiterate”な（文字を持たない）存在であった。しかし録画が簡単にできるようになった現在、あるいは正しい手話としてＤＶＤ教材などが多く出版されるようになった現在、そのための手話はあきらかに自然に発話される手話とは違っており、リテラシーにあたると考えられる。

（5）オラリティと図像性（iconicity）および CL（classifier）～アジアの手話と沖縄の手話による実験

アジアの災害手話と沖縄の手話による実験結果を集め、intelligibility と iconicity、CL（classifier）に注目して分析した。手話が別の国の手話を持つ人にも理解される場合、iconicity(図像性)で説明されることが多い。手話のオラリティを intelligibility と iconicity と CL との関係で研究した。十分教育を受けた若いろう者は、高齢者の手話が自然な手話であると感じることが多い。手話が学校教育の中で禁止されなくなってから、ろう学校では聞こえる教師が声を出しながら日本語対応手話（言語学的には手話ではないので手指日本語と呼ぶべし、と日本学術会議は提言している。）で教えてきた。さらに日本手話で育った子どもたちにも手話を使ってもよいが声を出しながら話せと強いてきた学校が多い。このことは多くの若い手話者が、

日本語の文法をベースとする日本語対応手話（手指日本語）は話せても昔ながらの日本手話が話せないことを意味する。むしろ禁止時代は、聞こえる先生たちの見えないところで、密かに手話で話していたために、日本手話自体が日本語対応手話（手指日本語）の影響を受けることはなかった。年配の人の手話は純粋な日本手話だと感じる人が多いのも当然である。この年配の手話話者の純粋な日本手話に見えるものの特徴はＣＬにあふれている。

手話は視覚言語であるがゆえに、iconicity はその特徴でもある。CL は iconic ではあるが、iconic なサインは CL だけではない。CL はそのものの形状や動きを表すもので、独得な規則に縛られている。Iconic な手話単語（「飛行機」等）が必ずしも intelligibility が高いわけではないことがわかった。一方、CL は intelligibility が高い。注目されるのは統語論レベルの iconicity（例：「行く」「来る」が手の方向で表される）であり、これも intelligibility が高いことがわかった。手話全体として intelligibility の高いものがオラリティ度の高いものであると考えてよい。それを DVD 教材などで、固定化すると CL は少なくなるが、統語論的 iconicity には変化がない。これは音声言語で言えば伝承のために固定化したものと同様の言語であると結論づけてよいと思われる。

以上、研究の過程で得られた資料および知見は、国際協力に携わる人や通訳士のトレーニングに活かすとともに、アジアの連帯に貢献するリスクコミュニケーションをろう当事者に提供していく。今後の研究の進展としては、視覚障害者の音声と触覚記号の関係に対象を広げていく。

引用文献

Castro-Caldas, A., (1998), “The illiterate brain---Learning to read and write during childhood influences the functional organization of the adult brain,” *Brain*. 121, 1053-1063.

Ong, Walter J., (1982), *Orality and Literacy*, Routledge.

Poizner H. et al., (1990), *What’s the Hands Reveal about the Brain*, MIT Press.

Polich, L. (2001), “Education of the Deaf in Nicaragua,” *Journal of Deaf studies and Deaf Education,* 6:4 Fall 2001, 315-326.

斉藤くるみ(2021)「視覚・聴覚障害者のオラリティとリタラシー」『日本社会事業大学研究紀要』68、193-209。

［Website］

日本学術会議（2017）「音声言語及び手話言語の多様性の保存・活用とそのための環境整備」
http://mind.c.u-tokyo.ac.jp/Sakai_Lab_files/Staff/GK2017.pdf

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計23件（うち査読付論文　14件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 斉藤くるみ	４．巻 68
２．論文標題 「視覚・聴覚障害のオラリティとリテラシー」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本社会事業大学研究紀要	６．最初と最後の頁 193-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 末森明夫・斉藤くるみ	４．巻 68
２．論文標題 「日本手話語彙にみる線条性：表語音節語につなげられた指文字にみる音声補字的用法に関する一考察」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本社会事業大学研究紀要	６．最初と最後の頁 109-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 末森明夫	４．巻 2
２．論文標題 「中世絵画史料《遊行上人縁起絵》《聖徳太子絵伝》《融通念仏縁起絵》諸本にみる不具および犬神人の描写に関する予備的考察」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 障害史研究（2），41-62，2021-03-25	６．最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 末森明夫	４．巻 62(1)
２．論文標題 「中古中世字書における聾唖吃字彙の受容と変容 ： 聾概念と唖概念の独立性、唖概念と吃概念の連続性」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『ろう教育科学 ： 聴覚障害児教育とその関連領域]』	６．最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 71(3)
2．論文標題 「日本聾唖教育史の新たな地平と非近代主義 ： アクターネットワーク論と存在様態論による徳川時代の唖と仕形の再解釈」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『社会学評論』	6．最初と最後の頁 411-428
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 62(2)
2．論文標題 日本手話および日本語対応手話におけるparole/ecritureの共時的ないし通時的考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ろう教育科学	6．最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 61(3)
2．論文標題 「 談義本『児戯笑談』にみられる唖関連記述 ： 「唖聾の脱周縁化」および「日本聾唖教育史の時系列区分再編」に関する予備的考察 」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ろう教育科学	6．最初と最後の頁 114-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 槻舘尚武	4．巻 37
2．論文標題 「検査性能に関わる諸概念」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『コミュニケーション障害学』	6．最初と最後の頁 117-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大野ロベルト	4．巻 62
2．論文標題 「『土佐日記』英訳ことはじめーフローラ・ベスト・ハリスの業績」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本研究	6．最初と最後の頁 69-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大野ロベルト	4．巻 52
2．論文標題 「〈なごり〉考ー「土地の名」を中心に」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『人文科学研究（キリスト教と文化）』	6．最初と最後の頁 136-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kurumi Saito	4．巻 sep 2019
2．論文標題 "Japanese Sign Language as Interdisciplinary Studies and Liberal Arts Education"	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Boston Conference Series | September 2019	6．最初と最後の頁 16-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森壮也	4．巻 単行本
2．論文標題 「フィリピンにおける障害アクセシビリティ」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 小林昌之編『アジアの障害者のアクセシビリティ法制――バリアフリー化の現状と課題』アジア経済研究所　2019	6．最初と最後の頁 147-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 28(2)
2．論文標題 「手話関連語彙史とvernacular」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 手話学研究	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 28(2)
2．論文標題 「『御用控之帳』にみられる仕形関連語彙」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 手話学研究	6．最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 28(2)
2．論文標題 「『児戯笑談』にみられる仕形関連語彙」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 手話学研究	6．最初と最後の頁 28-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 28(2)
2．論文標題 「『官刻孝義録』『愉婉録』にみられる仕形関連語彙」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 手話学研究	6．最初と最後の頁 31-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫・高橋和夫・Corrie Tijsseling	4．巻 28(2)
2．論文標題 「洋学資料における「態」概念の照射」.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 手話学研究	6．最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤政雄･末森明夫他	4．巻 28(2)
2．論文標題 「『唖生同窓会報告』における手話・筆談・口話関連語彙　ー 手話･筆談･口話語彙における訓読･音読およびサ変動詞化の動向」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 手話学研究	6．最初と最後の頁 66-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 斉藤くるみ	4．巻 25
2．論文標題 「日本手話の言語性」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大学教育研究フォーラム（25），20-29，2020	6．最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡部淳	4．巻 51
2．論文標題 国際理解教育における理念研究、方法研究の現段階	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本国際理解教育学会会報	6．最初と最後の頁 5―7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 27
2．論文標題 聾唖方言地図の布置：聾唖方言の音韻変化および概念編成	5．発行年 2018年
3．雑誌名 歴史言語学	6．最初と最後の頁 1－16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大野ロベルト	4．巻 65
2．論文標題 日本語のユニバーサルデザインをめぐってー視覚・聴覚に障害を持つ学生が共に学ぶために」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『日本社会事業大学研究紀要』	6．最初と最後の頁 101-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末森明夫	4．巻 77
2．論文標題 「唖のsymbolismに関する予備的考察：中国西南少数民族・民族期限神話と記紀神話をつなぐ唖話素」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『聾歴史研究』	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Ono, Robert
2．発表標題 The Three Trials of Flora Best Harris”
3．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 森壮也
２．発表標題 「ウガンダ手話に見られる動詞への「新たなタイプの語彙化」」
３．学会等名 日本アフリカ学会フォーラム「アフリカの手話言語の諸相」日本アフリカ学会第57回学術大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 森壮也
２．発表標題 「/山/-/木/問題から日本手話のCLの文法を考える」
３．学会等名 日本手話学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kurumi Saito
２．発表標題 "Japanese Sign Language as Interdisciplinary Studies and Liberal Arts Education"
３．学会等名 10th Academic International Conference on Multidisciplinary Studies and Education（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 末森明夫
２．発表標題 「聾唖図像学における《百面相》の布置　― 聾唖図像学における『脱周縁化』および『視覚論的転回』」」
３．学会等名 日本聾史研究会第1回発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 末森明夫
２．発表標題 「談義本『児戯笑談』にみられる唖関連記述 ー『唖聾の脱周縁化』および『日本聾唖教育史の時系列区分再編』に関する予備的考察」
３．学会等名 ろう教育科学会第61回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 末森明夫
２．発表標題 「日本の聾唖史における江戸時代後期の再布置 ー 聾唖の脱周縁化および日本聾唖史の時系列区分再編に関する予備的考察」
３．学会等名 日本手話学会第45回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡部淳
２．発表標題 「学びの全身化ー教育プレゼンテーション」
３．学会等名 欧州日本語教育研修会（パリ日本文化会館）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 大野ロベルト・相原朋枝編	４．発行年 2021年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 352
３．書名 『Butoh入門　肉体を翻訳する』	

１．著者名 渡部　淳	４．発行年 2020年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 222
３．書名 アクティブ・ラーニングとは何か	

〔産業財産権〕

〔その他〕

科研研究等
https://kurumi-zemi.amebaownd.com/posts/6105184

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	末森　明夫 (Suemori Akio) (20357255)	国立研究開発法人産業技術総合研究所・生命工学領域・主任研究員 (82626)	
研究分担者	森　壮也 (Mori Soya) (20450463)	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・新領域研究センター・主任調査研究員 (82512)	
研究分担者	西田　昌之 (Nishida Masayuki) (40636809)	日本社会事業大学・付置研究所・研究員 (32668)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	亀山　恵理子 (Kameyama Eriko) (50598208)	奈良県立大学・地域創造学部・准教授 (24602)	
研究分担者	相原　朋枝 (Aihara Tomoe) (60334562)	日本社会事業大学・社会福祉学部・准教授 (32668)	
研究分担者	鈴木　久美 (Suzuki Kumi) (60751013)	大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員 (34427)	
研究分担者	渡部　淳 (Watanabe Jun) (80366541)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	菱沼　幹男 (Hishinuma MIkio) (80406347)	日本社会事業大学・社会福祉学部・准教授 (32668)	
研究分担者	槻舘　尚武 (Tsukitate Naotake) (80512475)	山梨英和大学・人間文化学部・准教授 (33503)	
研究分担者	大野　ロベルト (Ono Robert) (80728915)	日本社会事業大学・社会福祉学部・講師 (32668)	
研究分担者	田村　真広 (Tamura Masahiro) (90271725)	日本社会事業大学・社会福祉学部・教授 (32668)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関